

清水・山城遺跡

多可郡多可町

清水・山城遺跡

社会资本総合交付金事業（主）丹波加美線道路改築に伴う発掘調査

兵庫県文化財調査報告
第385冊

兵庫県教育委員会

2011(平成23)年3月

兵庫県教育委員会

多可郡多可町

清水・山城遺跡

社会资本総合交付金事業（主）丹波加美線道路改築に伴う発掘調査

2011（平成23）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県多可郡多可町加美区に所在する、清水・山城遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、社会資本総合交付金事業（主）丹波加美線道路改築事業に伴い、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所の委託により、兵庫県教育委員会が2008（平成20）年度～2009（平成21）年度に実施した。また整理業務は、同事務所の委託により、2010（平成22）年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 本発掘調査は、2008年度が兵庫県立考古博物館の吉識雅仁・山田清朝、2009年度が同じく久保弘幸・上田健太郎が担当した。本発掘調査に先立って実施した分布調査、確認調査の概要については、本文中に記載している。
4. 整理事業は久保が担当した。なお整理事業に携わった職員については、本文中に記載している。
5. 本書は久保が執筆し、あわせて全体の編集をおこなった。
6. 本発掘調査および本書に関連する図面・写真・出土遺物は、すべて兵庫県立考古博物館において保管している。
7. 本発掘調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。
岡田章一（兵庫県立考古博物館）・西口圭介（兵庫県立考古博物館）・宮原文隆（多可町教育委員会）

凡例

1. 本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用いている。
2. 本書中の図で示した方位および座標値は、世界測地系によるものである。
3. 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。
4. 掘図中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。
P：柱穴 SK：土坑 SX：焼土および不明遺構

本文目次

| | |
|------------|----|
| I 遺跡の位置と環境 | |
| 1. 地理的環境 | 1 |
| 2. 歴史的環境 | 2 |
| II 調査の概要 | |
| 1. 調査に至る経緯 | 4 |
| 2. 発掘調査の概要 | 4 |
| III 遺構と遺物 | |
| 1. 概要 | 6 |
| 2. 層序 | 6 |
| 3. 遺構と遺物 | 8 |
| IV 結語 | 16 |

報告書抄録

挿図目次

| | |
|----------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置 | 1 |
| 第2図 周辺の遺跡分布(1/25000) | 3 |
| 第3図 調査区の位置 | 5 |
| 第4図 調査区全体図 | 7 |
| 第5図 調査区東壁地層断面図 | 8 |
| 第6図 土坑1・2 | 9 |
| 第7図 土坑1・2・4出土の遺物 | 10 |
| 第8図 土坑・柱穴 | 11 |
| 第9図 包含層出土の遺物(1) | 14 |
| 第10図 包含層出土の遺物(2) | 15 |
| 第11図 包含層出土の遺物(3) | 15 |

表 目 次

| | |
|---------------------------------------|----|
| 第1表 (主) 丹波加美線道路改築事業関連清水・山城遺跡調査一覧..... | 4 |
| 第2表 出土遺物観察表..... | 17 |

写真図版目次

| | |
|--|--|
| 写真図版 1 上：調査区北半（南から・2008年度調査区） 中：SK-1 下：SK-2 土器出土状況 | |
| 写真図版 2 上：調査区南半（北から・2009年度調査区） 中：遺構検出状況 下：SK-3・4 | |
| 写真図版 3 1. SK-1 土器出土状況 2. SK-1 土器出土状況 3. SK-1・2 検出状況 4. SK-2 土器検出作業 5. SK-2 土器出土状況 6. SK-2 土器出土状況 7. SK-4 検出状況 8. SK-4 断面 | |
| 写真図版 4 1. SK-4 完掘状況 2. SK-6 断面 3. SK-8 断面 4. SK-9 断面 5. SK-11断面 6. P-13断面 7. 作業風景 8. 作業風景 | |
| 写真図版 5 遺物(1) | |
| 写真図版 6 遺物(2) | |
| 写真図版 7 遺物(3) | |

I 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

清水・山城遺跡は、兵庫県多可郡多可町加美区に所在する。遺跡が所在する多可町は、兵庫県中部の東寄りに位置しており、800m前後の山塊が連なる中国山地の中にある。町域の80%を山林が占めていることでも明らかなように、町域に占める平地の割合は小さく、山塊を縫って加古川の支流が概ね北から南へと流下している。

清水・山城遺跡は、加古川の支流である杉原川左岸にある山麓緩斜面上に位置しており、調査地の標高は270m前後を測る。遺跡が立地する緩斜面は、遺跡の東側に、南北に連なる竜ヶ岳(817m)、篠ヶ峰(827m)、岩屋山(726m)等の山脈に形成された麓削面にあたる。

調査地の北側に接して清水谷川が流下しており、その浸食作用によって、急峻な崖面が形成されている。他の3方向は、比較的均等な傾斜を見せる麓削面であるが、山腹の崩壊によって落下してきたと思われる、最大数mを測る巨岩が散在しており、麓削面形成時の環境を物語っている。

杉原川は、流域に「杉原紙」を産すことでも著名であり、水量は多くないものの、現在でも清流を保っている。清水・山城遺跡周辺では、杉原川両岸の平地はきわめて狭く、川岸まで迫る山裾斜面が棚田として開墾されている状況を見せる。しかし、1.5kmほど下流の加美区市原から下流では、幅200~300mほどの平野が開けるようになる。

杉原川に沿って北上すると4kmほどで播州岬に至り、これを越えると兵庫丹波の北端に位置する丹波



第1図 遺跡の位置

市青垣町に至る。また、清水谷川に沿って登ると、峠を越えて丹波市水上町に至る。前者は、現在でも播磨北部から丹波に至る経路の一つとして、交通量も少なくない。また後者も、近年まで街道として利用されていたようで、調査時の聞き取りによると、旧水上郡との間の往来の主要な経路であったという。

2. 歴史的環境

清水・山城遺跡の周辺および杉原川流域では、これまで後期旧石器時代の遺跡は知られていない。縄文時代の遺跡としては、晩期の堅穴住居跡を検出した市原寺ノ下遺跡（31）、後期の土器が出土している市原熊野神社裏遺跡（35）が知られている（兵庫県教育委員会 2004）。特に市原寺ノ下遺跡では、コンテナ30箱を超える縄文時代晩期の土器が出土しており、型式学的な編年検討がおこなわれている（加美町教育委員会 1997）。これらの遺跡は、いずれも杉原川に沿う平野が開けた市原地区に所在することから、縄文時代後期以降、杉原川沿いの集落形成が進んだものと推測される。

弥生時代の遺跡としては、先述の熊野神社裏遺跡で弥生時代中期の土器が出土しているほか、市原地区よりも下流に寄った出口・丁田遺跡、三谷・丁田遺跡などで集落が存在したことが確認されているものの、これより上流部では、これまでのところ明確な遺跡は知られていない。

古墳時代には、上述の三谷・丁田遺跡において遣構が検出されているが、前期～中期の古墳は知られていない。後期になると三谷古墳群が形成されるものの、市原地区よりも上流部では古墳は知られていない。このように、生産力のある平野を伴わない杉原川上流部では、弥生時代～古墳時代の遺跡はごく貧弱な様相を呈している。

奈良時代～平安時代になると、市原西地区散布地（30）、森瀧谷周辺地区散布地（23）、清水・山城遺跡などが知られるようになるが、発掘調査でその内容が明らかにされた遺跡は少ない。

中世には、西宮神社周辺地区散布地（13）以下、市原熊野神社裏遺跡に至るまで、図示した範囲だけでも十指に余る遺跡・散布地が知られるようになる。清水・山城遺跡の直近では、清水谷川を挟んで対岸にある清水タカアゼ遺跡（5）で、中世前半期の土坑・柱穴・梵鐘鑄造遺構などが検出されているほか、清水才ノ神遺跡（8）で土坑・墓が、清水溝ノ本遺跡（7）で掘立柱建物跡、溝等が検出されており、このほかにも、雲門寺周辺地区散布地（2）、清水高山付近散布地（6）など、中世の遺物を散布する地点が多数知られている（加美町教育委員会 2000）。中世におけるこのような遺跡の急増は、この時期、杉原川沿いの開墾が一気に進んだことを示しているものと推量される。

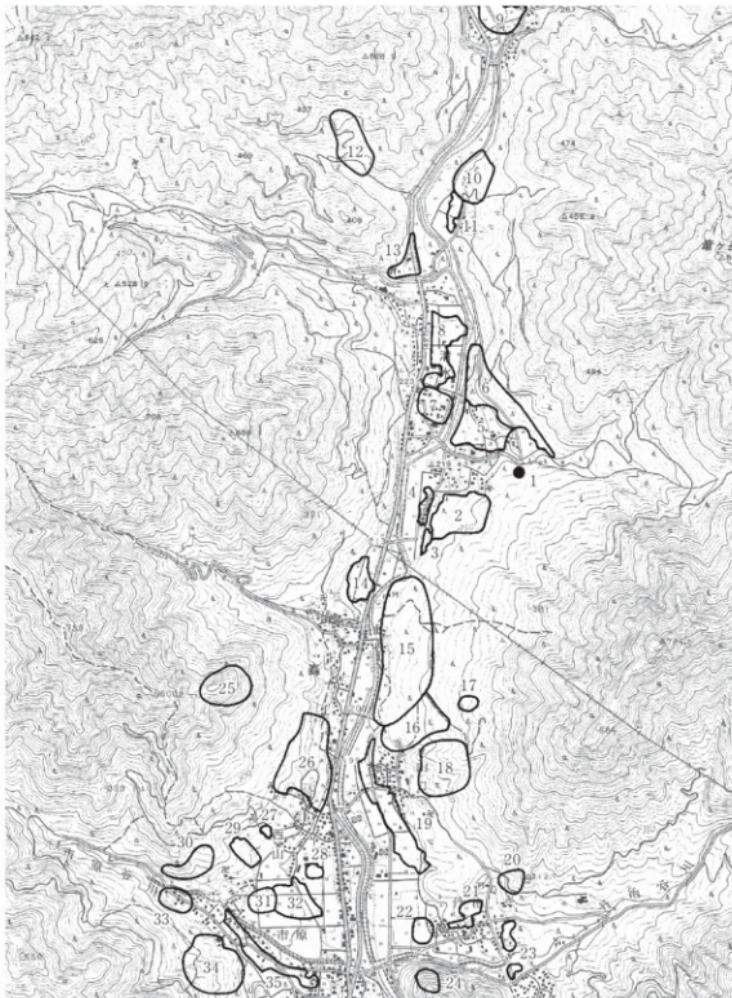
なお近世には、杉原川沿いに清水鉱山跡、吹屋ヶ谷鉱山跡（34）などの鉱山（銅）が経営されていることも、この地域の特徴として注目される。

参考文献

兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡分布地図』

加美町教育委員会 1997 『市原・寺ノ下遺跡』

加美町教育委員会 2000 『清水溝ノ本遺跡 豊部井杉遺跡 平成10年度加美町指定文化財』



- | | | | |
|----------------|---------------|--------------|---------------|
| 1 清水・山城遺跡 | 2 雲門寺周辺地区散布地 | 3 清水・山城遺跡 | 4 清水山城地区散布地 |
| 5 清水タカアゼ遺跡 | 6 清水高山村近散布地 | 7 清水渦ノ本遺跡 | 8 清水才ノ神遺跡 |
| 9 鳥羽遺跡 | 10 半淨寺址遺跡 | 11 鳥羽小町地区散布地 | 12 清水寺山遺跡 |
| 13 西宮神社周辺地区散布地 | 14 森北田遺跡 | 15 森和田坂地区散布地 | 16 山口北山田遺跡 |
| 17 藪澗谷地区周辺散布地 | 18 天王神社遺跡 | 19 山口遺跡 | 20 丹治後山田近散布地 |
| 21 丹治北山田道路 | 22 丹治前田道路 | 23 丹治垣内道路 | 24 丹治垣内道路 |
| 25 西山城山村近散布地 | 26 西山北山田地区散布地 | 27 西山莊嚴寺跡遺跡 | 28 西山堂ノ下地区散布地 |
| 29 西山南山田地区散布地 | 30 市原西地区散布地 | 31 市原寺ノ下遺跡 | 32 市原北溝地区散布地 |
| 33 市原奥垣内遺跡 | 34 吹屋ヶ谷龜山路 | 35 市原熊野神社裏遺跡 | |

第2図 周辺の遺跡分布（国土地理院1/25000「丹波和田・大名草」より作成）

II 調査の概要

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県北播磨県民局加東土本事務所多可事業所が実施する、(主)丹波加美線の道路改築事業に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成17(2005)年度に、同事業所の依頼に基づいて事業対象地の分布調査を実施した。この分布調査では遺構・遺物は確認されなかつたが、周辺における過去の調査状況から遺跡が存在する可能性が考慮されたため、平成19(2007)年度に確認調査を実施した。その結果遺構・遺物が検出されたため、当該範囲を対象として平成20(2008)年度、平成21(2009)年度の、2年度にわたって本発掘調査を実施した。

| 調査年度 | 調査番号 | 調査種別 | 調査期間 | 担当者 | 調査面積(m ²) |
|------|---------|-------|---------------------|------------|-----------------------|
| 2005 | 2005300 | 分布調査 | 2006/3/27 | 長濱誠司 | 6,000 |
| 2007 | 2007119 | 確認調査 | 2007/10/23~10/25・29 | 山本 誠 | 200 |
| 2008 | 2008160 | 本発掘調査 | 2008/8/18~2008/9/3 | 吉識雅仁・山田清朝 | 323 |
| 2009 | 2009160 | 本発掘調査 | 2009/6/30~2009/8/12 | 久保弘幸・上田健太郎 | 405 |

第1表 (主)丹波加美線道路改築事業間連清水・山城遺跡調査一覧

2. 発掘調査の概要

(1) 確認調査

確認調査は、上記事業地(6,000m²)を対象として実施した。調査は、2m×5mおよび1m×10mのトレンチ15か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

企画調整班 山本 誠

確認調査の結果、トレンチ9～13および15において遺物が出土し、トレンチ10・12で遺構(土坑)が検出された(写真図版3)。この結果、各トレンチを含む約700m²について本発掘調査が必要と判断された。

(2) 本発掘調査

本発掘調査は、2年度に分割して実施した。調査の体制は以下のとおりである。

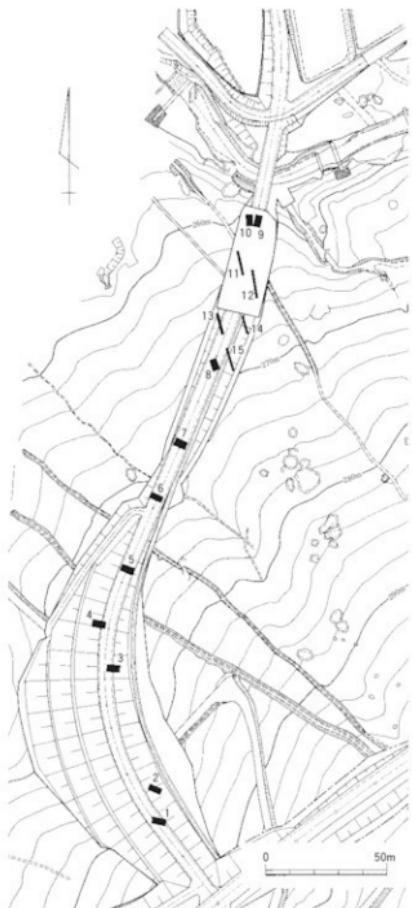
【調査の体制】

平成20(2008)年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第1班 吉識雅仁・山田清朝



第3図 調査区の位置

平成21（2009）年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館

埋蔵文化財調査部

調査第1班 久保弘幸・上田健太郎

【調査の方法と成果の概要】

事業予定地はほぼ南北に延びており、延長290m、幅20mを測る。本発掘調査区は事業地の北端に位置し、その北半を調査の第1年度に、南半を第2年度に調査した。調査区への重機の進入が困難であったため、いずれの地区においても、人力による掘削・遺構検出作業を実施した。遺構面の図化は調査担当者がおこない、あわせて写真撮影も実施した。

調査の結果、中世前半期を中心とする墓、土坑、焼土等が検出され、埋葬および祭祀に関連する遺跡であると判断された。

3. 整理事業の概要

整理事業は、平成22（2010）年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。整理事業は久保の担当の下、考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存課がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理については、すべて考古博物館において実施した。また、本書に収録した遺物写真については、タニゲチ・フォトに委託して撮影を実施した。

整理作業を担当した非常勤嘱託員は、下記のとおりである（順不同）。

八木和子・高橋朋子・真子ふさ恵・三好綾子

III 遺構と遺物

1. 概 要

清水・山城遺跡の調査区は、幅約18m、総延長約43mを測る。本発掘調査は平成20（2008）年度と平成21（2009）年度に分けて実施した。いずれの調査でも重機の進入が困難であったことから、調査はすべて人力によって実施した。調査の図化記録は、世界測地系に基づく座標点を基準に各年度の担当者がおこない、あわせて写真撮影も実施した。

調査地は麓肩面の先端部にある、北に向かって下がる斜面で、その北端部は清水谷川が形成した高さ数mの崖面となっている。西側はさらに傾斜面が続き、清水集落を経て杉原川に至る。南および東側は、山腹へと続く登り斜面である。長期にわたって杉の造林地として利用されていたため、各所に溝、疊積みの堆、倒木痕等が見られる状況であった。調査区内には、岩石が集中的に堆積した場所が散在しており、最大で直径数mにおよぶ大型の岩も多数見られた。大型の岩はいずれも現地表に露頭しており、遺跡形成時も同様の景観であったと推定された。

調査の結果、土坑・柱穴（？）・焼土等が検出され、中世前半期の遺物が出土した。遺構の分布状況に企画性は看取されず、密度も一般的な集落と比較してごく低いものと言ってよい。遺物は一部の土坑内からまとまって出土したものがあるが、それ以外は現表土下にある古土壤層（遺物包含層）より出土したものである。なお、平成21（2009）年度の調査時には、調査区内にある特定の大岩根から、まとまって出土する状況が見られた。これらは遺構を伴うものではなかったが、遺跡形成時に、大岩が何らかの「場の機能」を有していた可能性は高い。

なお、遺構の記録にあたっては、年度ごとに独立した番号を付している。記述上の混乱を防ぐため、ここでは一連の遺構番号に改訂して記載を行うこととする。記載番号が調査時の遺構番号と異なる場合については、調査記録との齟齬をきたさぬよう、対応関係を章末に記載しておく。

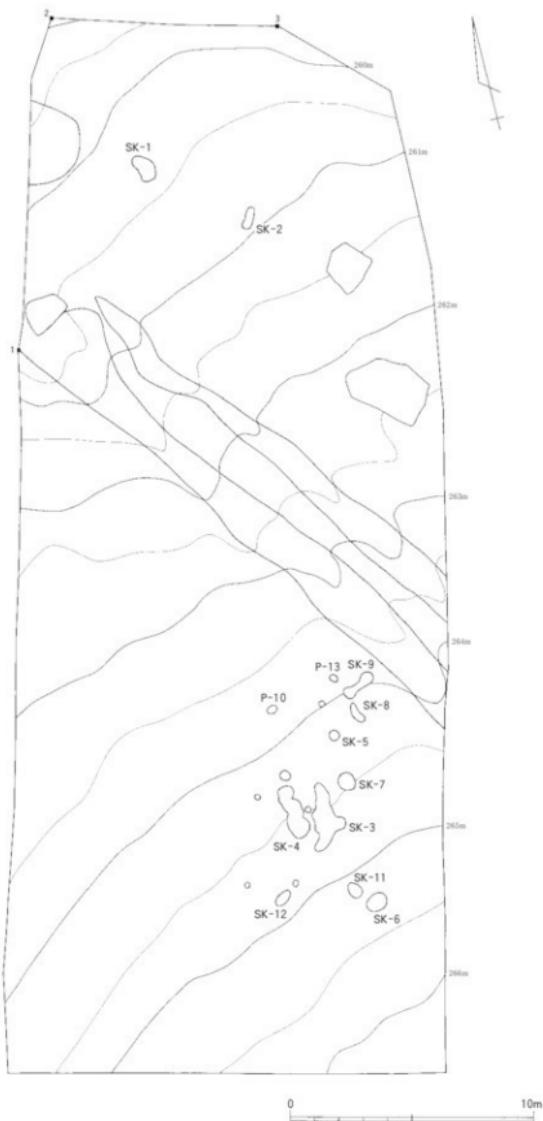
2. 層 序

遺跡の立地環境から、堆積よりも浸食作用が卓越するものと考えられ、一般的な平地の遺跡で観察されるような遺物包含層は認められなかった。現地表を形成する腐植土層の下位は、基盤となる麓肩面の堆積物が風化・土壤化したシルト質の層であり、遺物はこの層内もしくは表土層内に包含されていた（第5図）。本報告書では、この層を包含層と呼称しておく。

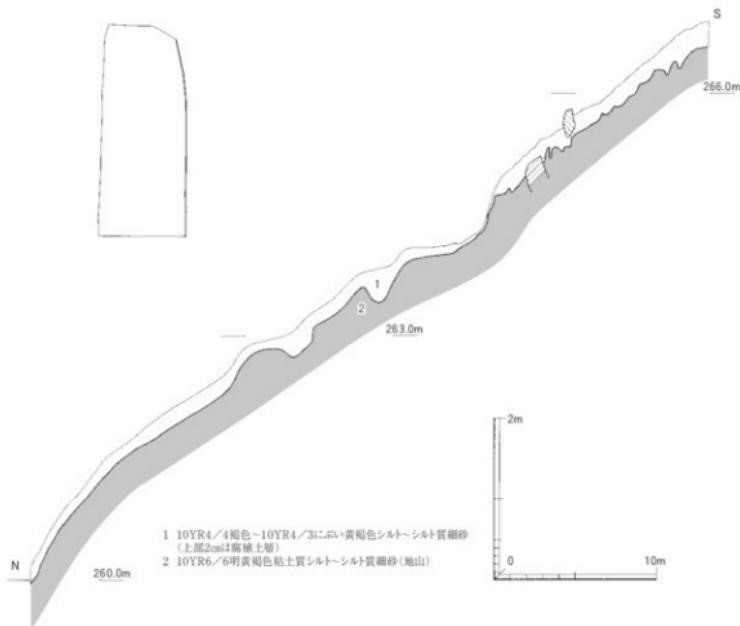
この下位が、大型の岩塊を含む硬化的麓肩面の堆積物である。遺跡内に散在する巨岩は、この層内に包含されるものの上部が突出したものと思われるが、機械力を用いない調査であったため、その当否を確認することはできなかった。

遺跡形成時の地表はある程度浸食を受けているものと推定されるが、調査技術上は土壤化した層上面での遺構検出は不可能であることから、検出作業は土壤化層を除去した麓肩面堆積物上面で実施した。遺構の多くでごく浅い掘方しか検出されなかつたのは、浸食により上部を喪失しているためのみならず、こうした調査技術上不可避の問題とも関連しているであろう。

| 座標 | X | Y |
|----|------------|-----------|
| 1 | -92738.652 | 54820.683 |
| 2 | -92726.859 | 54824.946 |
| 3 | -92729.233 | 54833.627 |



第4図 調査区全体図



第5図 調査区東壁地層断面図

3. 遺構と遺物

土坑・柱穴・焼土等が遺構として検出された（第4図）。ただし後述するとおり、柱穴の多くは自然による偽遺構の可能性が高い。また、明瞭な遺構は検出されなかったものの、遺跡内に散在する巨岩の縁辺から遺物が集中的に出土する状況が見られ、巨岩が何らかの「場の機能」を有していた可能性が高い。以下では、遺構種別ごとに記載を進める。

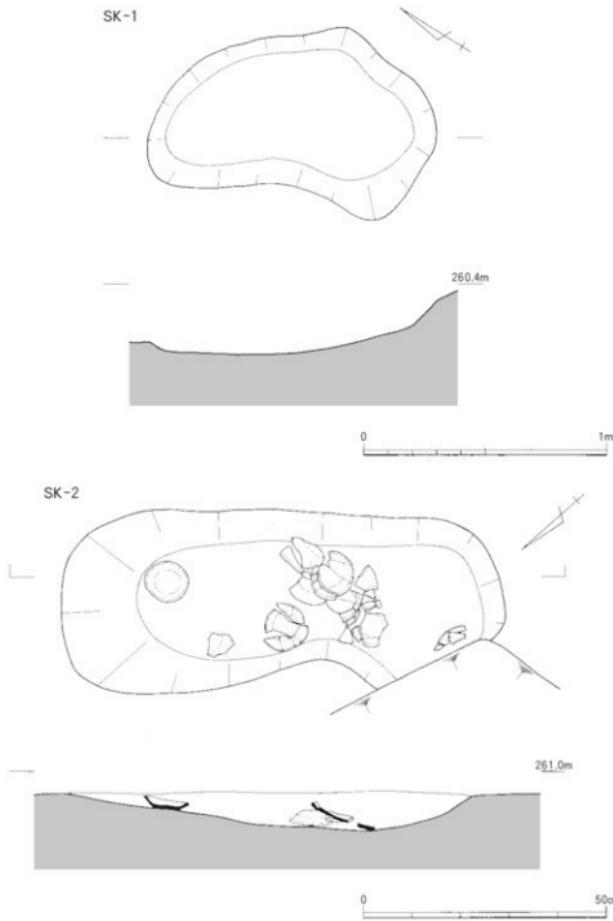
（1）土坑

今回の調査で、最も多く検出されたのが土坑である。ただし調査によって倒木痕であることが明らかになったもの、ほかにも人為的な遺構か否かを判断し難かったものも含めて記載する。

【土坑1】

遺構（第6図）

確認調査の第10トレーナーで検出された不整形な土坑で、長径60cm、短径38cm、深さ10cmを測る。土坑底は緩やかな船底状を呈する。土坑底の西～南西側で土師器皿・杯が出土した。杯は半欠品であるが、皿はいずれも完形品で、すべて上を向けた状態であった。また、皿のうち3点は重ねたような状態であった（写真図版3）。木棺の有無については確認できなかったが、土坑の大きさ・形態から推定するならば、棺は存在しなかったと考えられる。



第6図 土坑1・2

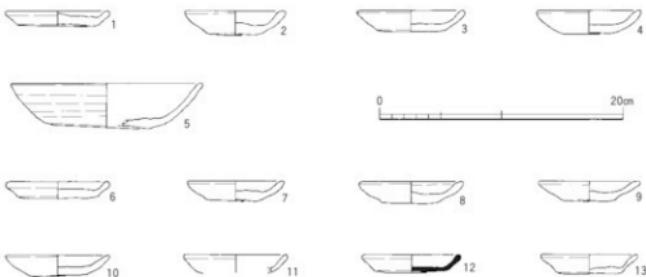
遺物（第7図）

1～4は土師器皿である。

1は、回転ヘラ切りの底部から、厚みのある口縁部が短く立ち上がる。底部と口縁部の境界は、やや鈍い接線をなす。

2～4は、よく類似した資料である。いずれも回転糸切りの底部から、口縁部が緩やかに聞いて立ち上がる。底部と口縁部の境界は丸みをおびる。口縁端部は、丸く厚みのある作りである。

5は、土師器碗である。回転糸切りの底部から、わずかに膨らみをもつ体部が緩斜度に立ち上がり、



第7図 土坑1・2出土の遺物

全体に扁平な印象を受ける。

【土坑2】

遺構（第6図）

調査区の北端に近い場所で検出された、歪んだ長楕円形の土坑で、長径91cm、短径38cm、深さ8cmを測る。土坑底は緩やかな船底状を呈する。土坑底の中央部および南北端より、土師器・須恵器の皿が出土しており、特に中央部の遺物はよくまとまっている。ほとんどの個体が上を向けて置かれており、破損は土圧によるものと思われる。土坑の形態、断面の状況等から木棺は存在しなかったものと思われる。

遺物（第7図）

6～11は土師器、12は須恵器の皿である。

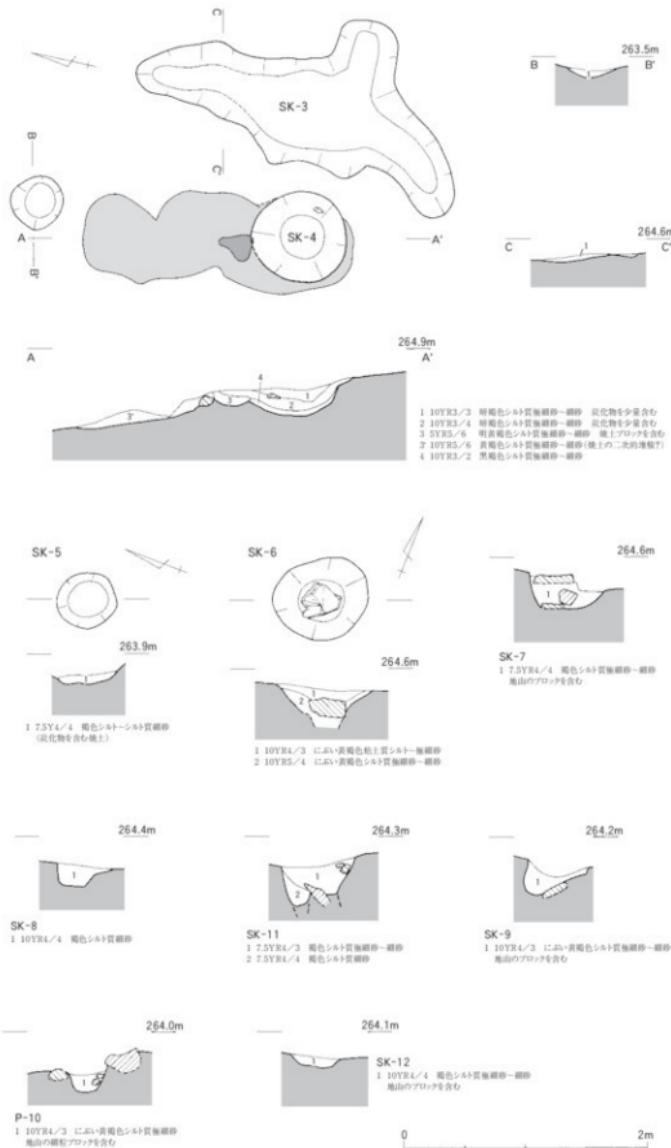
土師器皿は、底部を失っている11を除き、いずれも回転糸切りの底部をもつ。口縁部は短く立ち上がるるもの（6）と、これより長く立ち上がるるもの（7～11）とに分類される。また、端部を肥厚させるもの（6・8）と、厚みに大きな変化がないもの（7・9～11）とが見られる。底部と口縁部の境界は丸みをおびるものが多いが、わずかに平高台状となるもの（9）も見られる。

12は須恵器皿である。回転糸切りの底部から、口縁部が緩やかに開いて立ち上がる。底部と口縁部の境界は丸みをおびる。口縁端部は、丸く厚みのある作りとなっている。

【土坑3・4】

遺構（第8図）

土坑4は、調査区の中央よりやや南で検出された円形の土坑で、直径78cm、深さ25cmを測る。土坑底は緩やかな楕形を呈する。土坑底の北（斜面下）側に向かって、二次堆積と思われる焼土・炭化物片を含む土壤が1.4m×70cmの範囲で堆積しており（断面図3'層）、一部にはよく焼成された塊状の焼土も見られた（3層）。またこの焼土堆積の北には、直径45cmほどの円形を呈する、炭化物を含む凹部が検出された（第8図 断面図B-B'）。土坑4内部は、シルト質の強い堆積物で埋積されており、堆積状況から自然埋没と思われる。調査当初、土坑4については簡易な土師器窯と推定していたが、出土遺物がきわめて少なく、土坑の壁面も特に焼成を受けた形跡がないことから、窯ではないと判断した。



第8図 土坑・柱穴

土坑3は、土坑4の斜面上方に位置する、ごく浅い不整形な土坑である。当初、土坑4を窓と想定していた段階では、窓の斜面上方に、水の流入防止等の目的で掘られた溝かと考えていたが、土坑4が窓である可能性はなくなったことにより、土坑3の機能についても不明と言わざるをえない。

出土遺物（第7図）

13は、土坑4埋土の上層より出土した土師器皿である。回転ヘラ切りの底部から、口縁部が外反しつ立ち上がる。土坑3および土坑4北側の焼土層からは、図示できる遺物は出土しなかった。

【土坑5】

遺構（第8図）

ほぼ円形を呈する土坑で、直径56cm、深さ8cmを測る。土坑底は緩やかな皿状を呈する。土坑内は焼土で埋没しており、その状況からこの地点が火床であった可能性が高い。

遺物

遺物は出土しなかった。

【土坑6】

遺構（第8図）

歪んだ円形を呈する土坑で、長径78cm、短径66cmを測る。深さ10cmほどの位置で、中央部に大型の角礫を検出したことから、墓である可能性を想定して調査を進めたが、この礫の下位は腐朽した樹根状に先細りとなる土壤の落ち込みであった。こうしたことから、本土坑については、人為的な遺構ではなく倒木痕であると判断した。

遺物

遺物は出土しなかった。

【土坑7】

遺構（第8図）

不整形な土坑である。確認調査時に12トレンチで検出されており、土坑底に板石を敷き、壁に板石を立てたものと判断されていたが、調査の結果、土坑底・壁からは多くの板石状の石材が検出され、そのほとんどが、掘方とは無関係に地山中から土坑内に露頭していることが確認された。従って、これらの石材は人為的に設置されたものではなく、土坑そのものも人為的な遺構ではなく、倒木痕であると判断した。

遺物

遺物は出土しなかった。

【土坑11】

遺構（第8図）

梢円形を呈し、長径60cm、短径40cmを測る。土坑底は比較的平坦である。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と判断された。

遺物

遺物は出土しなかった。

【土坑8・9・12】

上述のほかにも、平成21（2009）年度調査区では複数の土坑状の落ち込みが検出された（第8図 土坑8・9・12）。しかしこれらについても、底面が明瞭ではなく、埋土が先細りに深くもぐりこむ、土壁が不規則にトンネル状となるといった状況が観察され、やはり倒木痕と考えられる。典型例は土坑9で、検出当初は二つの異なる土坑と認識していたが、掘り下げるにつれ、両者の間がトンネル状につながることがわかり、この点から樹根と判断した。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

（2）柱穴

柱穴として調査したものは、合計6基である（第4図）。しかし調査の結果、そのほとんどは掘り方の底が先細り状に深く落ち込んだり、地山との境界が不明瞭であったりという状況を示し、配列からも規則性が看取されず出土遺物も見られなかったことから、これらを柱穴として報告することには躊躇せざるを得ない。むしろ植物の根などによる土壤搅乱の痕跡である可能性が高い。いずれも、概ね円形ないし梢円形を呈し、長径は20cm～40cmを測るものである。

その中にあって、柱穴10としたものは埋土が明瞭で、何らかの遺構であった可能性がある（第8図）。長径40cm、深さ30cmを測る。出土遺物は見られなかった。柱穴13としたもの（写真図版4）は、暗色の土壤が漏斗状に先細りになりながら、深く落ち込んでおり、樹根と考えられる。

（3）表土～土壤化層出土の遺物（第9～11図）

既述のとおり、表土層および古土壤層からは多数の遺物が出土した。中でも2009年度調査区では、調査区南西隅に位置する大岩周辺で、遺物がまとまって出土している。

14～18は、平成20（2008）年度調査区、19～30は平成21（2009）年度調査区より出土した。

14は、土師器碗である。体部は、平坦な底部から大きく開いて、直線的に立ち上がる。口径と比較して器高が小さく、扁平な印象を受ける。内面に漆膜状の、光沢のある付着物が認められる。古土壤層より出土した。

15は、土師器碗である。底部はわずか凸面をなし、底部と体部の境界はやや鈍い。体部はほとんど厚みを減じることなく口縁端部に至り、端部はそのまま丸く仕上げている。底部は回転糸切りである。表土層より出土した。

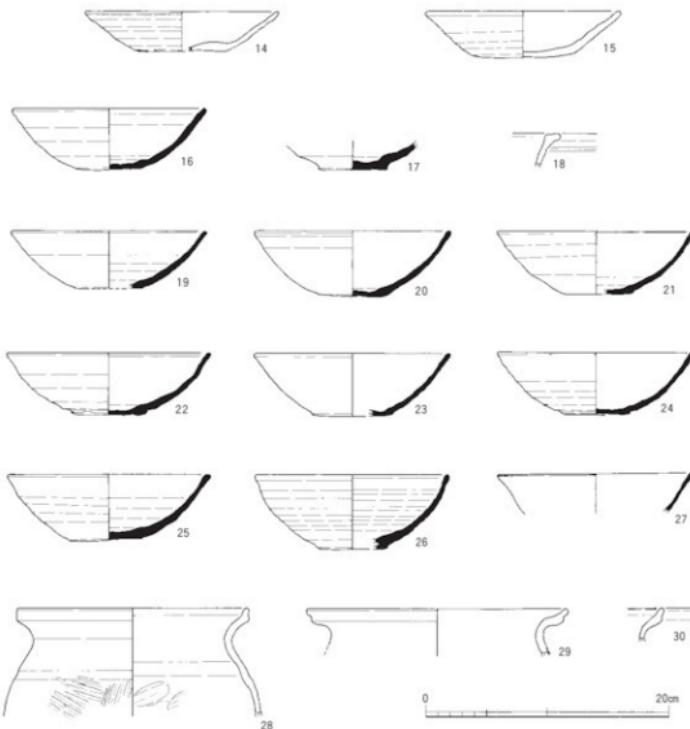
16は、須恵器碗である。15とはほど類同の形態を呈する。表土層～古土壤層の出土である。

17は、須恵器碗底部である。低い平高台を作り、体部は、そこから大きく開いて立ち上がる。底部は回転糸切りである。表土層より出土した。

18は、土師器鍋の口縁部であろう。直線的に立ち上がる体部の先端を、外方へ屈曲させて口縁部を作る。口縁部上面はわずかに凹面をなす。古土壤層より出土した。

19～27は須恵器碗である。いずれも古土壤層からの出土で、うち21～24・26・27が、調査区南西隅にある大岩付近から出土したものである。

底部を平坦に作り高台をもたないもの（19・20）、わずかに平高台状に作るもの（21～25）、比較的はっきりとした平高台を作るもの（26）などの形態差が認められる。またいずれの例でも、口縁端部付近に



第9図 包含層出土の遺物（1）

仕上げナデを施している。体部は概して開きが大きく、影らみも小さいが、26のみは影らみのある体部を作り、口縁部も急斜度に立ち上がる。また、内外面とも回転ナデによる棱線が顕著である。

28~30は、いずれも古土壤層より出土した土師器鍋である。

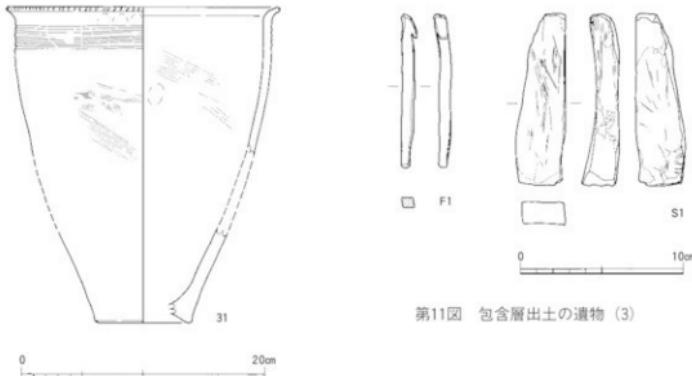
28は球形の体部から、屈曲して聞く口縁部を見せる。口縁端部はつまみ上げられ、外側にわずかに凹んだ面を作る。体部外面は平行タタキが施され、対応する内面には、途中に段をもつ梢円形のあて具痕が認められる。

29は大きく屈曲して聞く口縁部を見せる。口縁部外面は段をなし、端部は外上方へ張り出す。

30は28に近い形態を示す口縁部である。

31は、弥生土器である。体部～口縁部が平成20（2008）年度に、体部下部～底部が平成21（2009）年度の調査区より出土したが、他に同時代・同種の遺物が存在しないこと、胎土が類似することから、同一個体と推定して復元図化した。前期新段階の亮である。

上げ底状に作られた底部から、緩やかな影らみを見せる体部が立ち上がる。口縁部は外方へ短く屈曲する。口縁下には5条のヘラ描き直線文を、口縁端部にはキザミを施す。



第10図 包含層出土の遺物（2）

F 1 は鉄釘と判断した。長い身部は断面がほぼ正方形を呈し、薄く仕上げられた上端は、鋭角に折れている。その形態から鉛先かとも思われたが、上端（先端）部分が欠損した痕跡が見いだせず、平坦に終わっている可能性が高いこと、鉛とした場合には返しに相当する折り曲げられた部分も、その下端が鋭さをもたず方形に終わっていることなどを考慮し、釘の頭部が著しく折れ曲がったものと判断した。古土壤層より出土した。

S 1 は細粒の堆積岩を用いた砥石である。全体の1/4程度を欠くが、本来は直方体に整形したものである。表土層より出土した。

[遺構番号の記載]

本報告にあたり、2009年度調査分の遺構番号を、次のとおり変更している。

報告番号：SK-3（調査時番号：1号窯）・SK-4（1号窯）・SK-5（SK-4）・SK-6（SK-3）・
SK-7（SK-1）・SK-8（SK-5）・SK-9（SK-6）・P-10（P-9）・SK-11（SK-11）・
SK-12（SK-12）・P-13（P-7）

VI 結 語

清水・山城遺跡の今回の調査区は、遺構・遺物が僅少で、遺跡の性格に関する評価は困難である。以下では、本遺跡の調査を通じて把握された問題点を指摘して、結語としたい。

平成20（2008）年度調査区で検出された土坑2基は、遺物出土状況から、明らかに何らかの意図をもつて遺物が設置された遺構である。その機能については判断の材料に乏しいが、深い谷川に面し、背後が山麓斜面という調査地の立地条件などを勘案するならば、日常的な生活空間であった可能性はきわめて低いと考えられる。従ってこれらについては、木棺を伴わない簡易な埋葬施設、あるいは何らかの祭祀遺構と推定するのが妥当であろう。

平成21（2009）年度の調査区で、確実に人為的な遺構と判断できるのは、土坑3・4・5・12と柱穴9のみである。出土遺物はごくわずかで、遺構の性格を判断する資料としては著しく貧弱な状況である。しかし、土坑4・12が焼土あるいは炭化物集中を伴うこと、土坑4の斜面下方に広く焼土の二次堆積が見られたこと等からは、土坑4を中心とする空間が、火を焚くことと深く関係する機能を有していたものと考えられる。土坑4およびその周辺が窯跡である可能性はないと考えられるので、このような「土坑を伴う火焚き場」が日常的な空間であった可能性は低いと考えられる。

平成21（2009）年度の調査区では、調査区南西隅に位置する巨岩の周辺で、須恵器碗が多数出土しており、遺構内の遺物が貧弱であることと対照的な状況をなしている。出土状況は遺構に伴うものではないが、こうした巨岩周辺が何らかの「場の機能」を有していた可能性を指摘することができる。調査地が、日常的な生活空間を構築しない立地条件にあることを勘案すれば、このような「場の機能」としては、山林での作業場、あるいはやはり何らかの祭祀場といったものが考慮されよう。

以上のような状況から、今回の調査地で検出された遺構群は、簡易な埋葬、あるいは祭祀に関連するもの、特に後者の可能性を考えておきたい。

遺跡の所属時期については、今回出土した遺物が東播系須恵器碗・皿を伴うことや碗の形態などから、12世紀後半～13世紀前半の範囲に収まるものと考えられる。出土した土師器皿のうち、糸切りの底部をもつものは、製作技術上、須恵器皿と強い類似を示しており、東播系須恵器生産技術の普及を背景に、地域的に生産されたものと思われる。

清水・山城遺跡周辺では、清水谷川を挟んで対岸にある清水タカアゼ遺跡・清水才ノ神遺跡・清水満ノ本遺跡・雲門寺周辺地区散布地・清水高山付近散布地など、中世の遺物を散布する地点が多数知られている。中世におけるこのような遺跡の急増は、この時期、杉原川沿いの開墾が一気に進んだことを示すものであろうが、清水・山城遺跡における今回の調査地の状況も、山麓部に展開した中世遺跡（日常生活空間）に対応する、非日常的な空間として成立したものであろう。

第2表 出土遺物観察表

| 掲載番号 | 掘回番号 | 種別 | 器種 | 遺構・部位 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 技術的特徴 | | 備考 |
|------|------|------|----|---------|--------|--------|--------|----------|------------------|------------|
| | | | | | | | | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 1 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK1 | 8.1 | 6.8 | 1.3 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 2 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK1 | 7.9 | 4.7 | 2.0 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 3 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK1 | 8.4 | 5.8 | 1.8 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 4 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK1 | 8.2 | 4.3 | 2.0 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 5 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK1 | 15.5 | 8.9 | 3.8 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 6 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 8.0 | 6.7 | 1.4 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 7 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 7.6 | 4.4 | 1.7 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 8 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 8.1 | 4.6 | 1.8 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 9 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 7.8 | 4.5 | 1.7 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 10 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 8.4 | 4.6 | 1.8 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 11 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK2 | 8.2 | — | 1.5 | 内面回転ナデ | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 12 | 7 | 須恵器 | 壺 | SK2 | 7.7 | 6.2 | 1.5 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 13 | 7 | 土陶器 | 壺 | SK4 | 7.7 | 5.5 | 1.6 | 底部回転ヘア切り | 口縁部および内面回転ナデ | |
| 14 | 9 | 土陶器 | 壺 | 土壤層 | 15.7 | 7.5 | 3.3 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | 内面に縦状付着物 |
| 15 | 9 | 土陶器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 15.6 | 8.6 | 3.9 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 16 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層 | 15.6 | 5.8 | 5.1 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 17 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層 | — | 5.8 | — | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 18 | 9 | 土陶器 | 壺 | 土壤層 | — | — | — | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 19 | 9 | 須恵器 | 壺 | 土壤層 | 15.8 | 5.4 | 4.8 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 20 | 9 | 須恵器 | 壺 | 土壤層 | 15.8 | 5.7 | 5.4 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 21 | 9 | 須恵器 | 壺 | 土壤層 | 16.0 | 5.9 | 5.2 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 22 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 16.5 | 6.2 | 5.1 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 23 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 15.9 | 6.8 | 5.2 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 24 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 16.0 | 5.7 | 5.1 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 25 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 16.2 | 6.1 | 5.5 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | 外表面はナデ山が彌散 |
| 26 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 15.7 | 5.8 | 6.1 | 底部回転ヘア切り | 内面回転ナデ | |
| 27 | 9 | 須恵器 | 壺 | 表土層～土壤層 | 15.9 | — | — | 内面回転ナデ | 内面回転ナデ | |
| 28 | 9 | 土陶器 | 壺 | 土壤層 | 18.8 | — | — | 内面タキ | 肩部～口縁部内面ヨコナデ | 体部内面当て具痕 |
| 29 | 9 | 土陶器 | 壺 | 土壤層 | 21.3 | — | — | 内面ヨコナデ | 内面ヨコナデ | |
| 30 | 9 | 土陶器 | 壺 | 表土層～土壤層 | — | — | — | 内面ヨコナデ | 内面ヨコナデ | |
| 31 | 10 | 弥生土器 | 甕 | 表土層～土壤層 | 22.0 | 8.0 | 26.0 | 口縁端部ギザギザ | 口縁下沈線5条 | 体部内面 |
| 掲載番号 | 掘回番号 | 種別 | 器種 | 遺構・部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 技術的特徴 | | 備考 |
| | | | | | | | | 断面長方形 | 裏部を薄く仕上げて強く曲げる | |
| F 1 | 11 | 鉢製品 | 鉢? | 土壤層 | 9.4 | 0.8 | 0.6 | | | |
| S 1 | 11 | 石製品 | 砥石 | 表土層 | 10.6 | 3.1 | 2.3 | 石材不明 | 表裏Bおよび側面を加工する仕上砥 | |



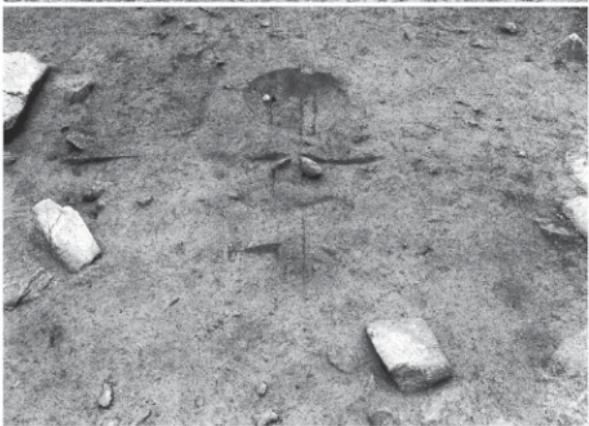
調査区北半（南から）
(2008年度調査区)



SK-1



SK-2土器出土状況





1.SK-1土器出土状況



2.SK-1土器出土状況



3.SK-1・2検出状況



4.SK-2土器検出作業



5.SK-2土器出土状況



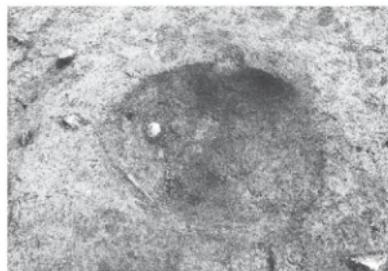
6.SK-2土器出土状況



7.SK-4検出状況



8.SK-4断面



1.SK-4完掘状況



2.SK-6断面



3.SK-8断面



4.SK-9断面



5.SK-11断面



6.P-13断面



7.作業風景



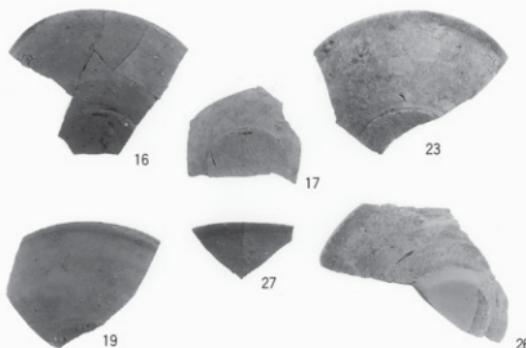
8.作業風景



遺物 (1)



14



16

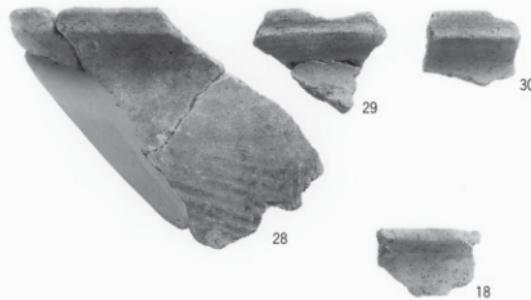
23

17

27

19

26



28

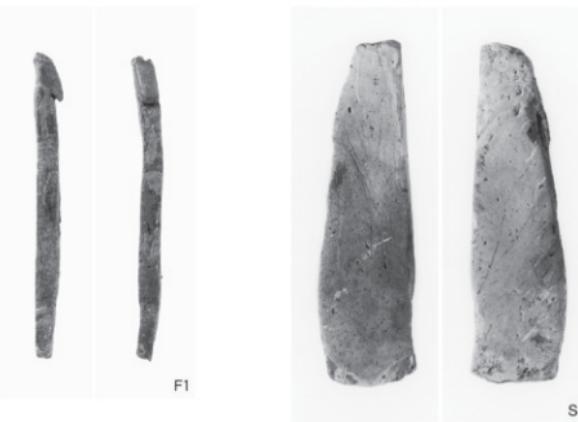
29

30

18



31



遺物 (3)

| 報告書抄録 (Outline of the Report) | | | | | | |
|-------------------------------|---|---------------------------|--|---|--|--|
| ふりがな | きよみずやましろいせき | | | About the Report | | |
| 書名 | 清水・山城遺跡 | | | Excavation report of the Kiyomizu-Yamashiro site | | |
| 副書名 | 社会資本総合交付金事業(主)丹波加美線道路改築に伴う発掘調査 | | | Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol.285 | | |
| シリーズ名 | 兵庫県文化財調査報告 | | | The Author/Editor: Hiroyuki Kubo | | |
| シリーズ番号 | 第385巻 | | | | | |
| 編著者名 | 久保 弘幸 | | | Hyogo prefectoral museum of Archaeology Address: 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan | | |
| 編集機関 | 兵庫県立考古博物館 | | | | | |
| 所在地 | 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 | | | | | |
| 発行年月日 | 平成23(2011)年3月22日 | | | Publication : March 22, 2011 | | |
| 所取遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 東経 | | |
| 清水山城遺跡 | 市町村 | 遺跡番号 | northern latitude | east longitude | | |
| 多可郡多可町 加美区清水 | 28365 | 270020 | 35° 09' 45" | 134° 56' 07" | | |
| 遺跡調査番号 | 調査の種別 | 調査期間 | | 調査原因 | | |
| 2008160 | 本発掘調査 | 2008年8月18日～2008年9月3日 | | 社会資本総合交付金事業(主)丹波加美線 道路改築事業 | | |
| 2009160 | 本発掘調査 | 2009年6月30日～2009年8月12日 | | | | |
| 遺跡の種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | |
| 墓・祭祀遺跡 | 鎌倉時代 | 土坑・土坑墓・焼土 | | 須恵器・土師器 | | |
| 要約 | 清水・山城遺跡では、鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初頭）の、土坑墓・土坑および焼土が検出され、須恵器・土師器が出土した。遺跡は、簡易な理葬および祭祀の場であったと推定される。 | | | | | |
| Abstract | In the Kiyomizu-Yamashiro archaeological site, we found simple burial of early Kamakura period (date 12 th century～early 13 th century). We also excavated Sue wares and Haji wares of same age. The Kiyomizu-Yamashiro site is a site of the burial and the feast. | | | | | |
| Address of the site | Kami, Taka, Hyogo pref. Japan | Date of the Excavation | 18, Aug.～03, Sep. 2008 30, June～12, Aug. 2009 | | | |
| Category of the site | Ritual site, Burial | Archaeological Features | | | | |
| Period of the site | Kamakura period | Pits, Gutters, Pit burial | | | | |
| Main Rerics | Sue wares, Haji wares | | | | | |

兵庫県文化財調査報告 第385冊
多可郡多可町

清水・山城遺跡

社会資本総合交付金事業（主）丹波加美線道路改築に伴う発掘調査

2011(平成23年)3月22日 発行

編集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 船場印刷株式会社
〒670-0994 兵庫県姫路市定元町4-2
